

⑤ 男と女の話しことば

——日本語教育と性差検証の視点から——

遠藤 織枝

はじめに

話しことばを書きことばとの対比で、その特徴を指摘するとき、(1)文が比較的短い(2)文の順序が正常でない場合がある(3)同じ文や言葉をくりかえすことがある(4)言いさしで文を終ることがあるなど、の中村通夫の分析はよく知られている。これらは一般的な話しことばの性質を示したものではあるが、これをさらに^(注1)具体的な談話の中で細部にわたってみて、現在の日本語の話しことばの実情を掘り下げてみたいと考える。たとえば「～ので」と「～から」のような類似の表現の使われ方を知ることは、日本語教育の現場にいるものとしてのさしせまった課題でもある。

また、話しかたの男女による違いに言及したものに以下のようなものがあるが、それらの論述が現在の実態に当てはまるかどうかを検証してみたいと考える。

すなわち、

(A) 一般に男性の話しぶりは力強く支配的で主張性が強く、率直で、権威をもちたいと思う。女性の話しぶりは柔らかで協調的でえん曲的であるが、つまらぬ話題に熱中し、繰り返しが多いと言われる。(注2)

(B) 男性においては(1)感動詞の使用頻度が高く、その種類も多い。(中略)(4)発話中で倒置構文の占める割合がそれぞれ大きいといった点に特徴がある。

女性の場合は、(中略)(5)文末を言い切らない形で終わる例が多い。(中略)(7)要求表現の際にぼかしや言いわけをまぜながらあたりのやわらかい形でもちかけることが多い。(中略)全体として女性のほうが情緒的で優雅な表現を選ぶ傾向がみられるようである。(注3)

(C) 一般に女性的な表現は、断定を避け、命令的でなく、自分の考えを相手に押しつけずに述べる、といった特徴をもつ。これに対し、男性的な表現は、断定、命令を含み、主張、説得をするための表現をもつ。(注4)

のようなものである。

(A)については、「一般に」「多いと言われる」など、あいまいな表現で責任の所在が明確でないし、述べられた内容についても具体的事実は全く示されず、何を根拠にこのように言われているのか納得できない点が多い。

(B)も「全体として」と記されているが、いったいどの範囲の全体なのか、女性全体を調べた結果なのか、またそのようなことが可能なのか疑問が残る。文末を「傾向が見られるようである」としているのも、どのような根拠に基づいての推論か示されていないで無責任な書き方である。

(C)は「女性的な表現」「男性的な表現」として、「女性の」「男性の」、ときめつけていない点は、解釈に幅をもたせ、また単純に男女で割り切ろうとしないという配慮が働いているが、「女性的」「男性的」という分け方は性差を前提としているので、その特徴がはたして真実がどうか確かめる必要が出てくる。

これらはいずれも印象批評的な域を出ていない反面、一般社会に受容され易い側面ももっているので、事実に基づいてその当否を検証する必要があると思う。

以上のふたつの問題点をもとに今回は、インタビューをうけたゲストの談話の文末の様相、接続語句の様相、否定表現を中心にみていこうと思う。

対象は今回の男性の話しことばの資料のうち10人と、昨年「女性の話しことば」を調べたときの10人とである。談話の話者の一覧表は後に掲げる。

I 文末の様相

インタビュー어의問いに答える番組でそのゲストの話し方をみていくと、それぞれの文の終わりは次のようになっている。(インタビュー어의質問をQ、それぞれの話者の答えをAとする。)

例(1) Q: さて、いきなりなんですが、最近の教育は、どんなふうに見てらっしゃいますか。

A: や、相変わらずよくないですねえ。／まひとことでは、あー前よりは、こう質的に状況悪くなってんじゃないかっていう印象ですけど。^①
(ケース5) ^②

例(2) もう五月五日にはもう入りました。北海道に。(ケース2)
(ママ)^③

例(3) Q: どんなふうにお感じになります。

A：むずかしい質問で。(ケース12)
 のような4つの終わり方がある。すなわち、

- ①は、ひとつの発話の文として完結している。また言い切っている。(以下、「完結文」「言い切り文」とする)
- ②は、発話としては完結しているが断言せず言いさして終えている。(以下、「言いさし文」とする)
- ③は、語順が倒置している。(以下「倒置文」とする)
- ④は、文が完結しないで話が切れている。(以下「中止文」とする)

の4つの型である。今回対象とする20人の話者の談話の各文末の型を調べたのが表Iである。

表I 文末の様相

ケース	④ 全文数	⑤ 文数	①			②			③				
			完結文	中止文		言い切り文	言いさし文		倒置文	%			
男	1	109(15)	94	72	76.6	22	23.4	66	70.2	28	29.8	12	12.8
	2	86(15)	71	50	70.4	21	29.6	48	67.6	23	32.4	11	15.5
	3	91(6)	85	68	80.0	17	20.0	72	84.7	13	15.3	9	10.6
	4	109(15)	94	60	63.8	34	36.2	67	71.3	27	28.7	1	1.1
	5	90(6)	84	67	79.8	17	20.2	56	66.7	28	33.3	8	9.5
	6	96(22)	74	56	75.6	18	24.4	55	74.3	19	25.7	11	14.9
	7	98(18)	80	65	81.3	15	18.7	61	76.3	19	23.7	2	2.5
	8	89(38)	51	24	47.1	27	52.9	20	39.2	31	60.8	4	7.8
	9	82(16)	66	62	94.1	4	5.9	53	80.3	13	19.7	3	4.5
	10	108(24)	84	70	83.3	14	16.7	50	59.5	34	40.5	6	7.1
平均				75.2		24.8		69.1		30.9			8.6
女	11	108(13)	95	74	77.9	21	22.1	64	67.4	31	32.6	7	7.4
	12	109(12)	97	73	75.3	24	24.7	63	64.9	34	35.1	8	8.2
	13	106(30)	76	45	59.2	31	40.8	34	44.7	42	55.3	2	2.6
	14	104(26)	78	69	88.5	9	11.5	61	78.2	17	21.8	4	5.1
	15	83(23)	60	41	68.3	19	31.7	38	63.3	22	36.7	3	5.0
	16	80(23)	57	41	71.2	16	28.8	24	42.1	33	57.9	3	5.3
	17	107(22)	85	71	83.5	14	16.5	54	63.5	31	36.5	2	1.2
	18	108(18)	90	75	83.3	15	16.7	61	67.8	29	32.2	5	5.6
	19	105(54)	51	36	70.6	15	29.4	32	62.7	19	37.3	0	0
	20	107(28)	79	64	81.0	15	19.0	58	73.4	21	26.6	8	10.1
平均				75.9		24.1		62.8		37.2			5.1

対象とした談話の中の文の数は全文数としたもの(表の④)であるが、この中には、「はい」「ええ」「そうです」「ありがとうございます」など応答詞やきまったあいさつなども多数含まれている。しかし、それらでは言いさすこともないし、後にみる接続語句が文中に挿入されることもないので、今回の分析対象から除外して考えた。つまり「はい」「ええ」などの文を除いたものを文数(表の⑤)としてその中で使われる比率をみていくことにする。

以下に、各話者の完結文と中止文の使われ方、言い切り方と言いさし文の使われ方、倒置文の使われ方をみていく。

I-(1) 完結文と中止文

表Iの①は整った文として発話を終えているか、完結しないまま次の文に移っていたり、話者が交代したりしているか、を比べたものだが、完結した文で終えている率がいちばん高いのは男性では(ケース9)で94.1%、女性は(ケース14)で88.5%である。またその率が最も低いのは、男性では(ケース8)の47.1%、女性では(ケース13)の59.2%である。(ケース8)の話者は全発話数の半分以上が中止文ということである。

各10人の平均でみると男性の発話では75.2%、女性では75.9%が完結文で終えられている。一方中止の形で終えられているのは男性24% に対し女性24.1%である。完結した文として発話しているか、中止した文で終えているかに関しては、男女差はほとんどなく、いずれも約4文に1文の割に中止文を使っているといえる。

中止文といっても、話しことばでは、イントネーションやポーズのおき方、会話の流れなどで補いあえる部分も多いので、十分にコミュニケーションの役を果たしていることはいうまでもない。

I-(2) 言い切り文と言いさし文

ここでは

例(4) 「今度6年生になります」(ケース15)

例(5) 「12試合終えて2試合残しています」(ケース19)

例(6) 「まず北に行きまして東京から水戸そして仙台、盛岡」(ケース2)のように言い切っているか。

例(7) 「あごを使ったためにこういう顔になってしまったんですけれども」(ケース10)

例(8) 「今一瞬ねえ、ぼくじゃないねこのお話はと思って」(ケース6)のように言いさしたまま終えているか、といった文の終わり方をみてる。(表Ⅱの②)

ここで言い切りとしているのは(4)、(5)のように助動詞の終止形で言い終えているもの以外にも、(6)のように文の形としては完結せず中止文であっても発話者が自分の意志を明確にし、断定しているものである。言いさし文とは(7)のように「～しまった」と言い切らずに「けれども」をつけて余韻を残しているものや、(8)のように文も完結せず発話も途中で終わっているもの、疑問文で相手に問いかけているものなどである。

男性で言い切り文をいちばん多く使っているのは(ケース3)で84.7%、女性では(ケース14)の78.2%である。言いさし文がいちばん多いのは男性は(ケース8)の60.8%、女性は(ケース16)の57.9%である。(ケース8)(ケース16)の発話では半分以上が言いさして終わっているということになる。平均では、男性は言い切り69.1%対言いさし30.9%、女性では言い切り62.8%対言いさし37.2%である。

同一話者で完結文と言い切り文の使われ方をみると、(ケース8)(ケース13)がどちらも中止文、言いさし文を多用していて完結文、言い切り文が少ない。このふたりに関しては、完結文と言い切り文の使われ方がほぼ共通しているといえる。一方、(ケース10)は中止文の使用では男性10名中9番目でありあまり使わない方であるのに、言いさし文では2番目に多く使っている。この話者は、文の型としては完結しているが、断定をあまりしないというタイプになる。

女性の話者では(ケース16)が言いさし文をいちばん多く使い、中止文は4番目と、両者の使われ方がやや異なるが、それ以外は、中止文の多い人は言いさしも多い、完結文の多い人は言い切り文も多い、と両者に共通した使われ方をしている。女性の方が、言い切る場合は完結文を用い、言いさすときは中止文という人が多いということである。

平均してみると女性の方に言いさしで終わる人が多いが、今回のインタビュー番組で、男性ゲスト10人に対しては男性のインタビュアーが5例、女性のインタビュアーが5例であったのが、女性ゲストの場合は全部男性インタビュアーであったこと、それぞれのゲストにより話題が異なり話しやすいテーマや答えにくい質問など一定の条件で問われていないことなど、個々の談話の条件の差の影響なども考えると、性差があるとは言い切れないほどの数値の差だと思われる。

次に言いさし文の文体に多用されている「～けれども」についてみる。

この語には「～けれども」「～けれど」「～けど」「～けども」のようなバリエーションがあるので、語ごとに分けて話者による使い方の差があるかどうかみる(表Ⅱ)。なお、接続助詞本来の機能を持ち、文中で使われているものも多いが、これらは後の接続語句のところでは合わせて数を出すことにし、ここでは文末に使われたものだけに限っている。ここでとりあげるのは本来の逆接の接続助詞の機能は失われ、言い切ることを避けて付加した一つまり言い切ることで強く響き、相手に押しつけがましい印象を与えるのを避けたいとの意図で用いられた一よく言えば気配りの、悪くいえばぼかしの表現である。

表Ⅱ 文末の「～けれども」の使われ方

ケース	文数	～けれども	～けれど	けど(ね)	～けども	計	けれども文数
男	1	94	0		12	12	12.8%
	2	71	3		2	6	8.5
	3	85	0		7	7	8.2
	4	94	1		2	4	4.3
	5	84	0		6	7	8.3
	6	74	1		2	3	4.1
	7	80	0		8	10	12.5
	8	51	1		1	5	9.8
	9	66	0		5	5	7.6
	10	84	3		3	9	10.7
平均	78.3	9		4.8	11	7.9	
女	11	95	5		4	9	9.4
	12	97	1		7	8	8.2
	13	76	2		6	9	11.8
	14	78	2		0	2	2.5
	15	60	0		2	2	3.3
	16	57	2		11	15	26.3
	17	85	3	1	5	3	14.1
	18	90	10		0	1	12.2
	19	51	2		5	7	13.7
	20	79	0	1	6	7	8.8
		76.8	27	2	4.6	7	11.0
(ケース16を除く)							8.4

語形としては「～けど(ね)」の形でいちばん多く使われている。これは男女とも同じである。次に多いのは男性では「～けども」、女性では「～けれども」である。女性の方が丁寧な語形を選んでいることになる。

文末にこれら接続助詞を付加する文の文数に占める割合をみると、26.3%、つまり約4文に1回はつけるというのから2.5%、40文に1回というものまでその差は大きい。男女各話者の平均でみると男性7.9%、女性11.0%と女性が多く使っているようにみえる。女性10人を個々にみると(ケース16)が突出して多用しており、この話者は口癖のようにどこでもつけている人である。そこで、上下を除いて中間だけを平均する体操競技の採点のような処理をしてみるとその平均は男性の平均とほぼ同じになる。したがってこの程度の差から、男性はぼかす表現は少なく、女性は多い、と判断することはできない。ただし、男性の例では平均的に使われているのに対し、女性の例では多用する人とほとんど使わない人の差が大きく、個人差が大きいという性による差は現われている。

I-(3) 倒置文

ここでは、述部が先に発話されて、あとに補足成分がくる

例(9) 「あつかったですね、あの時は」(ケース2)

例(10) 「親切じるし、かがやいてるんですよ、親切っていう字がね」(ケース1)

などのような倒置表現の使われ方をみえる。

述部が文の最後にくる書きことばの語順を中心に考えると、これらは倒置ということになるが、話しことばでは、時間の連続の中で直後に続くのであるから、特に文理解の上で妨げとなつてはいない。倒置を本来の語順からみて正常でないものとみることは話しことばではできない。話しことばと書きことばの違いについて大石初太郎も次のように述べている。

「わたしの話は…おまえの話はむだがない。よく整理されている、そのまま文字にしてもいい文章になる、と言われたことがある。(略)あとからあとから湧いてくる想をそのままことば化して次から次へとしゃべり続ける人はことばの帳じりを合わせて整った表現を構成しにくいところが出てくる。ことばの不整が出がちである。(中略)わたしは用心深く頭の中で整理し用意してからでないと言

べれない。(中略)そのまま文字化してもいい文章になるなどと言われるわたしのことは、実は頭の中で書いた文章を音声化しているようなものなのである。(中略)

古田拓氏は話していても面白い人だった。重みのある内容を気軽な調子であとからあとから口から出して聞き手を刺激し、示唆を与えてくれた。(中略)あるとき氏の速記録をみて驚いた。氏の話はどこが文頭やらどこが文末やら見分けのつかぬ所が多く支離滅裂の箇所が多分にあった。(中略)話しことばの正体は文字化される形だけのものではないのだからこういうのをお粗末な話しことばと簡単に片付けるわけにはいかない。(中略)氏のごときは一種の話しことばの達人と言うべきで、それに比べてよく整理された話だなどと言われるわたしのものなどは実は貧弱な話しことば、わたしなどは非力な話し手だと考えざるをえない。」(注5)

このように話しことばは書きことばの整い方などとは別の基準からみていくことが必要で、倒置表現の多寡も、多用している話者の話し方のタイプと、使わない話し方と、それぞれに個性としてとらえるべきだと考える。もちろんその個性もその話者にいつも見られるといったものでなく、話題の内容、問いかけに対する答えやすさ、答えにくさなど個々の状況から生れてくるものである。

表Iの③でみると、かなり多く使い、15.5%を占める話者から全く使わない話者までである。

(ケース1)(ケース2)(ケース3)(ケース6)が全部の文末の中10%以上を倒置で終えている。これらはみな男性で、まず重要と思われることを述べ、あとから補っていく話し方を好むタイプといえる。男性でもこの技法をほとんど使わない話者(タイプ4)(タイプ9)などもいるが、全体の平均では男性の方がこの技法を多く用いている。これは、話の運びが整ってはいないが、結果として変化をもたせる話しかたが男性の談話に多いということでもある。

II 接続語句の様相

II-(1) 「～から」と「～ので」

日本語教育でもこの接続語句についてはよく問題にされ、

例(1) むかえのバスが八時に来ますから、門の前に急いで集まってください。

例12 ラタナーさんは急に用事ができたので、行くのをやめました。(『日本語初歩』P 222、下線遠藤)

と、同じページで両方の表現を出し、その使い方を教えることになっているテキストが多い。

そこでは「～から」の後続文には平叙文の他に依頼、命令、勧誘、禁止、義務許可などを表すもの、「～ので」の後続文は平叙文だけと区別している。

『日本文法大辞典』(松村明編・明治書院 1974)では「～ので」で依頼表現も導く例をあげ、

「『から』は前件を主体的に取り立てて後件に結びつけるために、表現主体の立場が強く前面に出てきて押しつけがましい印象を聞き手に与えると感じるためか、一般には『ので』が用いられないとされる依頼表現などにおいても、『試合終了後は大変混雑いたしますので、お帰りの切符は今のうちにお求めになっておいてください』(中略)のように、表現を丁寧にしようとする場合にしばしば用いられる。また、男性に比して、女性に好んで「ので」を多用する傾向がみられるのも、いかにもそうなる、あるいはそうするだけのやむをえない理由がそこにあるといったニュアンスを『ので』が負っていることによるものとみられる(後略)」(倉持、P 660)

の記述がみられ、「～から」「～ので」の使用に男女差があることに触れられている。ここでは、実際に「～ので」がどのような文脈で用いられているのか、男女差があるのかをみていく。

「～ので」「～から」に続く前文をみると

例13 「やっぱりバレーボール好きですので、離れられないと思ってましたけど。(ケース19)

例14 「講演があるので、そのあとにコンサートやっていただけませんか、などと…」(ケース15)

例15 「その気がないもんですから、むこうがあきらめますね」(ケース9)

例16 「このニュースわかったから次のニュースにいきたいみたいナ…」(ケース6)

例17 「お母さんの歌を好きな人が悲しむからだめとかゆって…」(ケース15)

例18 「そういう時には仕方がないから人頼みますけど」(ケース20)

のように常体、敬体どちらでのスタイルでも使われている。これらの数を男女別、スタイル別で分けたのが表Ⅲである。

表Ⅲ

	～ の で			～ から		
	男	女	計	男	女	計
敬 体	6	22	28	61	53	114
常 体	10	24	34	14 (4)	22 (16)	36 (20)
計	16	46	62	75 (4)	75 (16)	150 (20)

()引用文中のもの

まず、スタイルでみると、「～ので」の前文は常体がやや多いが、敬体も45%使われていて、一方に偏る使い方ではないことがわかる。「～から」の前文は敬体が圧倒的に多く、常体は24%にすぎない。しかも、例(16)(17)に使われている「わかったから」「悲しむから」の常体は後に「みたいな」「…とかゆって」の語句で示される引用文の中で使われているものである。常体の合計の36例中20例がそれに当たっている。(18)のように、話者自身の発話で「～から」の前文を常体にしてしているものは16例で、「～から」の全文数 150 の中の約10%ということになる。

「～から」と「～ので」が常体で受けるか、敬体で受けるかについて、日本語教育では、「～です/ますから～です/ます」「～から～です/ます」「～ので～です/ます」のような型を教えて「～から」の前文は常・敬体を用い「～ので」の前は常体のもので使うように教えることがある。(注6)

今回の20人の話者たちの「～から」「～ので」の使用例でみるかぎりでは、

- (A) 「～ので」の前文は敬体・常体どちらも同じように使われている
- (B) 「～から」の前文は敬体が90%ぐらいを占めている
- (C) 「～から」の前文に常体が使われている場合は、引用文の中であることが多い

と言える。話しことばを教える日本語教育の初歩の段階では、前文を制限するなら、「～ので」の場合よりも「～から」の場合でする方が現実的だということに

なる。

また、「～から」と「～ので」の使い分けを教えるとき

例(19) Q：どうしてごはんを食べないのですか。

A：おなかが痛いからです。

のように「どうして」と問われたときは「～からです」と答えることを教え、ここでは「～のです」は使えないと指摘することがある。(注7)

こうした「おなかが痛いからです」のような表現は、日常の話しことばの中では「おなかが痛いから。／痛いからね。」のように「です」を除いて使われることが多い。

この種の文末に「～から」がくる用法と似たものに「～じゃないんで。／～ますのでね」のように「ので」のものも実際にはいくつか見られる。

例(20) 「もうがむしゃですんでね。」(ケース19)

例(21) 「やっぱり長期にきちっとした形で取材しないとダメだと気付きましたので。」

のようなものである。

つまり、「どうして食べないの?」と尋ねられたとき「おなかが痛いので」というのもありうるということである。「です」をつける「～からです」は言うが「～のです」とは言わないと教えるのは正しいが、それにとどまらず「～から」で終わるようなくだけた文体の中では「～ので」で終わることもありうることは示しておく必要がある。

次に「～から」「～ので」それぞれの使われ方に性差があるか否かをみていく。

「～から」の使用例は男女同数の75である。談話の文数も応答詞などを除いた実質的な文の数で男性全体の談話数 783 文、女性全体で 768 文で、ほぼ同数であったから、「～から」の使われる頻度もほぼ同じといえる。

「～から」に続く前文のスタイルについてみると、男性の方に敬体のものが多くなっている。これは先の「けれども」が女性の方に多く使われることで女性の方が丁寧なことばづかいをする、という結果と矛盾したものとなっている。

「常体+から」のものの中では女性の方が多いが、その中の引用文を除いた話者が直接常体で話しているものについては10対6で男性の方が多くなっている。

「～ので」は、全体で見ると女性の方が多く使っている。個人別の使い方で「～ので」「～から」の使い方が偏っているかどうか調べてみる。つまり、同一人物で「から」と「ので」の使用状況を比べて、(E)「から」を「ので」より多く使う、(F)「から」と「ので」と同じ、(G)「ので」を「から」より多く使うの3の型に分けてみる。

(E) から>ので

ケース1(4>0)、2(12>2)、3(18>2)、4(5>0)、6(6>1)、7(9>0)、9(14>1)、11(4>1)、12(14>3)、15(7>4)、16(6>3)、17(15>3)、18(12>2)、20(13>3)

(F) から=ので

ケース5(2=2)

(G) ので>から

ケース8(7>4)、10(2>1)、13(9>3)、14(4>1)、19(11>0)

男女とも「から」を多く使うケースが多く、「ので」の方を多く使うケースは男性2名、女性3名である。

このように個人の使用についてみる限りでは、男性の方に「から」を使う人が多く、女性に「ので」の方を多く使う人が多いという結果は得られない。

II-(2) 「ので系」と「から系」

前掲『日本文法大辞典』には先のつづきとして「すでに一語の接続詞と化している『それで』と『だから』の間にも、この『ので』と『から』と同様の関係がみられる(後略)」と述べられている。

ここでも同じ考え方で、接続助詞「～から」、接続詞「だから」「ですから」を「から系」とし、接続助詞「～ので」接続詞「それで」「で」「そこで」を「ので系」としてまとめ、「から系」と「ので系」の使われ方を比べてみる(表Ⅳ)。ここでわかるのは「～ので」だけでは女性の方が男性より多く使っていたが、それを含む「ので系」となると、逆に男性の方に多く使われていることである。また、「ので」と「～から」だけをくらべると「～から」の方が男女ともはるかに

多く使われていたが、「ので系」「から系」でみると男性の場合はほぼ同じぐら
いの使われ方になっている。

表Ⅳ

	～から	だから	ですから	から系計	～ので	それで	で	そこで	ので系計
ケース1	4	7	0	11	0	6	6	0	12
2	12	0	1	13	2	2	5	0	9
3	18	2	3	23	2	0	14	0	16
4	5	7	1	13	0	6	16	1	23
5	2	8	1	11	2	1	12	0	15
6	6	3	2	11	1	1	4	1	6
7	9	0	3	12	0	2	4	0	6
8	4	3	0	7	7	11	0	0	18
9	14	5	2	21	1	1	2	0	4
10	1	5	1	7	2	2	10	1	15
	75	40	14	129	17	32	73	2	124
ケース11	4	1	3	8	1	0	0	0	1
12	14	2	2	18	3	0	0	0	3
13	3	4	0	7	9	1	4	0	14
14	1	0	0	1	4	2	5	0	11
15	7	3	0	10	4	0	4	0	8
16	6	5	0	11	3	0	2	0	5
17	15	7	1	23	3	1	2	0	6
18	12	1	1	14	2	1	3	0	6
19	0	0	1	1	11	0	0	0	11
20	13	10	1	24	3	2	4	0	9
	75	33	9	117	43	7	24	0	74

したがって、『日本文法大辞典』の、女性の方が「ので」を好むとの記述も補足
注記が必要となると思われる。

個々の語についてみても、「それで」「で」の使用が男性にはるかに多いこと
を除いて、他の語ではどちらかが一方の性に多く使われる、ということはこの表
からは言えない。

なお、ここでは「だから」「それで」「で」などの接続詞を順接の因果関係を表すものとして一括して計算したが、使われ方をみると、順接の接続詞ではない用法がある。次のようなものである。

〔だから〕

例⑫ 最限なくなっちゃうのでほかのことでできなくなるんですねえ。だからできるだけだから今までも集めかかったり集めたかったものいっぱいあるんですけどねえ…これはもうあまり意味ないなあと思ってやめたんですね。

(ケース1)

〔それで〕

例⑬ 固定してたので鼻をちょっとみせられなくてそれで、一応あの…テーピングと固定するやつで止めてたんですけれども。(ケース8)

例⑭ 重傷を負ってる方が多かったので、ぼくがいちばん最後になって、それでま、病院に連れていかれて。(ケース8)

〔で〕

例⑮ 文学者や児童文学者が多くて、で、お互いに力をあわせて…しようというので…勉強したりしました。(ケース14)

例⑯ このドロボー夫婦が住んでいたんです。で、ま、はっきりドロボーかどうかはわかりませんが…(ケース14)

bの「だから」「それで」「で」は、前文を原因として後半を結果とする2文をつなぐ働きをしているものではなく、単に、文を続ける、後続文を導き出すだけの機能をしているものである。中でも「で」は本来の順接の機能のもの14例に対しbのような、単に文と文をつなぐだけの役をしているものが83例あった。性別にみると男性にこの続けるだけの役割の使い方の例が多くみられた。

文をつなぐのに接続詞を使う話者は、その接続詞を選び、そこに用いることで、接続の意味を指定している。したがって、接続詞や指示語を使わないで接続する文に比べてより論理的で筋道の通った文ということになる。

しかし、ここでみるように、接続詞は使っても、それが本来の因果関係を示す順接の接続詞の機能としてでなく、単に次のことばを導くためにつなぎの音として使われてくると、接続詞を多く使われているからといって直ちに論理性の高い

話し方とは言えなくなる。

Ⅲ-(3) 逆接の接続語句

ここでは逆接の接続語句の使われ方をみて、順接のものとの使われ方の関係を見る。

まず、逆接語句で最も多く使われている「～けれども」からみていく。先に述べたようにこの語にはいくつかのバリエーションがあるが、ここでは敬意、丁寧度は問題にしないので語形が異なるものもすべて同じ語として扱う。この語にも逆接の意味で使われるのと、婉曲用法として使われるものと2種類ある。

例(㉗) することなすことおかしいけれど、その方の身になってみると「ああそうなんだなあ」と思うことがあって(ケース10)

例(㉘) まだそこまでいくのは大分かかると思うんですすけども。(ケース17)

例(㉙) 最初はこういう映画つくる気はなかったんですすけれども、この「痴呆性老人の世界」を作ったおかげで…なくちゃいけないかと…(ケース17) のような使い方である。(㉗)は逆接として使われているが、(㉘)(㉙)は逆接の意味はない。(㉙)のような文末の言い切りの代わりにくるものはIでも述べたが、婉曲用法としては(㉙)のような文中に入っているものもある。

つぎに接続詞「でも」をみる。この語も逆接の接続詞として使われている場合と、単なるつなぎとして使われている場合がある。

例(㉚) 失敗したり、まちがえたりっていう数がものすごく多いんです。でも、その分ね、あの必ずね起き上がればいいんだからって……(ケース13)^a

例(㉛) Q: 気分あらたですか。

A: そうですね。でも、ま、初心にかえてなんかやっとな、これから一人前っていうか……(ケース13)^b

のように(㉛)には逆接の用法はない。

逆接の接続語句をみる場合、こうした語の文中での機能をみきわめておく必要がある。

接続語句の用法として順接を用いるのと、逆接を用いるのとでは文の組み立てに対する意識が異なるはずである。順接の文より逆接の文の方が発話の際に抵抗

があるはずである。あるがままの順序で続けるのが順接だから順接の文の方が素直に発話できるとも考えられるし、逆接の方が論理的に考える、俗に言えば屈っばい文になるともいえる。このように考えると接続語句に順接を使うか逆接を使うかも話し方の特徴をみる尺度となるはずである。順接の「ので系」と「から系」をまとめたもの、逆接の「けれども系」と「だけど、でも、ところが、～が」をまとめたものをケース別に示して個人による順接好き逆接好きの差があるかどうか調べてみる。表V、表VI

表V

	順 接			逆 接			
	から系	ので系	計	けれども	でも	その他	逆接計
1	11(1)	12(4)	23	28(25)	1(1)	0	29(26)
2	13(0)	9(6)	22	5(3)	1(1)	0	6(4)
3	23(1)	16(9)	39	23(21)		1	24(21)
4	13(0)	23(17)	36	12(9)		4	16(9)
5	11(2)	15(12)	26	18(15)		1	19(15)
6	11(0)	6(4)	17	6(6)		0	6(6)
7	12(0)	6(6)	18	15(12)		5	20(12)
8	7(2)	18(7)	25	16(14)	2(2)	0	18(16)
9	21(0)	4(2)	25	8(6)		3	11(6)
10	7(1)	15(9)	22	5(5)		0	5(5)
	129(7)	124(76)		136(116)	4(4)	14	154(120)
11	8	1(0)	9	17(13)	5(1)	2	24(14)
12	18	3(0)	21	24(16)		3	27(16)
13	7	14(3)	21	13(13)	3(1)	0	16(14)
14	1	11(4)	12	12(10)	8(0)	1	21(10)
15	10	8(4)	18	19(15)		0	19(5)
16	11	5(1)	16	23(21)		0	23(21)
17	23(2)	6(2)	29	2(0)		2	4(0)
18	14	6(3)	20	21(13)		0	21(13)
19	1	7(0)	8	19(13)		1	20(13)
20	24	11(4)	35	13(10)		1	14(10)
	117(2)	72(21)		163(124)	16(2)	10	189(126)

()内は単につなぐだけの用法の接続語句数。

表Ⅵ 表Ⅴからつなぎ用法の接続語句を引いたもの

		順 接			逆 接			
ケース		から系	ので系	計	けれども系	で も	その他	計
男	1	10	8	18	3	0	0	3
	2	13	3	16	2	0	0	2
	3	22	7	29	2	0	1	3
	4	13	6	19	3	0	4	7
	5	9	3	12	3	0	1	4
	6	11	2	13	0	0	0	0
性	7	12	0	12	3	0	5	8
	8	5	11	16	2	0	0	2
	9	21	2	23	2	0	3	5
	10	6	6	12	0	0	0	0
計		122	48	170	20	0	14	34
女	11	8	1	9	4	4	2	10
	12	18	3	21	8	0	3	11
	13	7	11	18	0	2	0	2
	14	1	7	8	2	8	1	11
	15	10	4	14	4	0	0	4
	16	11	4	15	2	0	0	2
	17	21	4	25	2	0	2	4
	18	14	3	17	8	0	0	8
	19	1	7	8	6	0	1	7
	20	24	7	31	3	0	1	4
計		115	51	166	39	14	10	63
総 計				336				97

表Ⅴは接続語句の使用度数を語別にみたものである。これらの中には本来の機能で使われたものも単なるつなぎの用法や婉曲用法で使われたものも混在しているので、本来の機能のものだけにしたのが表Ⅵである。

順接系と逆接系では全体でみると、順接系がはるかに多く、逆接系の3.5倍である。男性全体では5倍、女性全体では2.6倍である。男性の順接多用が顕著である。

個々のケースでは、男性では10人とも順接の方を多く使用しているが、女性で

は(ケース11)(ケース14)が、逆接の方を多用している。

次に男女差をみると、順接系では男性の「から系」122例に対して女性115例、「ので系」の男性48に対して女性51、合計170:166、とほとんど差はない。

逆接系では、男性で「でも」を逆接で使った例は1例もないのに対し女性は14例ある。「けれども系」でも女性が男性の約2倍使っている。合計でも女性63、男性34と女性が約2倍になっている。このことは、従来の女性の話し方は男性に比べて論理的でないとの説を否定することになる。

逆接の表現を使うのは先にも述べたように順接より論理的な思考を必要とし、理屈っぽい言い方になるからである。

Ⅲ 名詞「わけ」の使われ方

談話の中で「～というわけで～」 「～したわけですよ」のような表現が使われることがある。

例(2) それでまあいろいろな検査をやったわけですよ。(ケース4)

例(3) 終わってからね、その角川さんお人払いをというわけだ。(ケース4)
のようなものである。

「わけ」の語義としては『大辞林』(三省堂、1988)には

①なぜそういう状態になったかという理由。その事柄が成立する根拠。②そういう結果にいたったいきさつ。事の次第。③言葉の意味、内容。④物事の道理、条理、常識。(以下略)

のように記されている。独立した名詞としての外に「わけではない」「わけにはいかない」などの形式名詞化した用法もある。いずれにせよ、この語には道理、理由、根拠の語義があることから、論理的な話し方をしようとする場合に使われる表現であることに違いはない。

(2)の例でも話者が聞き手に説明する際、その理由をはっきり示したい、つまり筋道を立てて話そうとして「わけ」が使われている。「それで～わけですよ」のように理由を表わす接続詞「それで」と呼応して使われていることからその意図は明らかである。

(3)は理由を示そうという意図は強くないが、その事情を説明しようという聞き

手への働きかけの一種であることに変わりはない。相手に自分の話が受け入れられることを前提とし、そうした相手にだから伝えるのだ、という意識が働いて使われている例である。疎縁な関係の人にはこのような表現は使われないはずである。

この語句の使われ方をみると15回、12回も使い口癖とも思える(ケース4)(ケース20)から、全く1度も使わない(ケース5)(ケース2)などまである。男性だけでみると使う人6人、使わない人4人で、使う人は回数も多い。女性の場合は使う人7人、使わない人3人であり、使う人の数は男性より多いが、それぞれの回数では男性より少ない。したがって平均的にみると、この語の使い方に男女の差ははっきりしないといえる。つまり、論理、理屈、根拠を明らかにする語「わけ」の使い方に性差はみられないのである。

Ⅳ ねじれ文の使われ方

大石初太郎も述べているように、書きことばと違って話しことばは推敲したり添削したりしながら表現するわけではないので、文がねじれていくことがよくある。しかし、それらはイントネーションやポーズの置き方をまじえて耳でとらえるとき、少しも不都合を感じさせない場合が多い。

また、ねじれても、後から言い直したり、補ったりして聞き手の予想するとおりの話の展開にひきもどされていくのが普通である。倒置や補足などもその修正の技法のひとつと考えられる。そのため、書きことばとしての文法に合っていないでも話しことばでは十分に伝達の役を果たしているわけである。

しかし、中にはねじれたまま話がずれていき、聞き手の予想する展開にならず、聞き手に肩すかしを食わせ、予想を裏切り、結果として聞き手を混乱させる場合がある。その種のをここで「ねじれ文」としてとり扱う。

例④ そういうのをつぼ庭ってぼくらってんですけどね。／つぼ庭、ふつう、つぼ庭って家の中の1坪2坪の坪です。／ぼくら、このかたかなでツボ、あるいは漢字のこう小さい壺ですね。(ケース1)

例⑤ Q: そもそものおつきあいは、その……

A: はぁ、おとしのスクールコンサートで。／これは互助組合というお仕

事でいったわけですけども、そこで出会って、私がやはりこれは卒業式に行って何か子供たちに伝えたいという気持ちで行きました。

(ケース11)

のようなものである。話しことばでは他の要素も加わるから、これらの文でも、直接耳で聞けば文字化したものよりはるかによく理解できる。しかし、(34)の例では坪庭とは違うもっと小さいスペースのことを言っているらしいことはわかるが、途中から文字の説明になってそれていってしまっている。(35)では「これは」の接続語句のために、それに続くスクールコンサートの説明が行われるだろうと予想してきく聞き手に肩すかしをくわせている点で「ねじれ」とするのである。

このようなねじれの発話数を話者別に示したのが表Ⅵである。1回も「ねじれ」の発話をしていない人が男性で4人、女性で7人いる反面、男性の(ケース1)(ケース4)では6回もねじれた表現をしている。この表現に関しては男女差が

表Ⅶ

ケース	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
ねじれ回数	6	0	3	6	0	0	2	0	4	3	24	3	0	0	2	2	0	0	0	0	0	7

はっきりしていて、男性話者の方に圧倒的に多い。

V 否定の表現

ここでみるのは(A)「～(し)ないです」「ないです」のように否定の助動詞または、形容詞に断定の「です」を加えた表現にするか、(B)「～しません」のように「する」の連用形に丁寧の助動詞の「ます」をつけ、その否定形「ません」にするか、否定文の発話の際にどちらの型が選ばれているかについてである。

(ケース15)は

例(36) 保母さんにはならなかったんですよって……

例(37) もうないんですけど

例(38) 言わなくなったんです

例(39) 聞いたことないです

例(40) そんなに遠い所じゃないんです

例(41) 楽ではないですけど、それでもあまりやせなかったですね

例(42) そんなことないです

例(43) Q：苦にならないタイプですか

A：ならないですね

とすべて(A)のタイプの否定表現を用いている(ケース16)も(A)のタイプで通している。

(ケース19)は

例(44) 考えていませんでした

例(45) Q：ブロックはしなかった……

A：しませんでした

と(B)のタイプを用いている。(45)のように「しなかった?」と問われた場合にも、そのままおうむ返しに相手の言い方で答えるのではなく、「しませんでした」と敬体で答えている。

(ケース14)は

例(46) いいことばかりもございませんですけど。

例(47) 沈黙があるってことはあまりないですね。

のように(B)タイプのさらに丁寧度の強い表現と、(A)のタイプと両方使っている。

(ケース18)も

例(48) とは思わなかったですね

例(49) 使わなかったですね

例(50) そうかもしれませんですね

の(A)、(B)両タイプを使っている。

男性の話者では

(ケース6)

例(51) Q：テレビ朝日はいらしたの、それで。

A：あ、来なかったですね

例(52) あったんじゃないですかね

(ケース4)

例(53) 要するにそのぶれがほとんどないんですよ

例54) そのときは調べたことはないですから

のように、(A)タイプばかりが使われている。女性の場合も(ケース19)以外は、(A)、(B)の混用、あるいは(ケース15)(ケース16)のように(A)タイプばかりの人もいる。

こうした事実は、日本語教育の否定文の指導の際の参考になる。

日本語教育の初歩の段階では

例55) Q:あなたは先生ですか。

A:いいえ、わたしは先生ではありません。

例56) Q:机の上に本がありますか

A:いいえ、本はありません。

のような指導を行っている。

今回の調査の結果、56)のように存在を否定する際「ありません」とするのは適切だが、55)の答え方がこれでいいのか、という問題が出てくる。

女性の特別丁寧な話者以外は、「～です」の否定は「～ないです」のように発話していることがわかったからである。

もちろん「先生ではありません」と答えさせることを間違いというのではない。これも必要であるが「先生じゃないです」のような言い方もどこかで指導しておいたほうが現実的に日本人と会話するときの違和感が少ないのではないかと考えられるのである。

動詞の否定形の例も58)「ならなかったんです」(41)「やせなかったです」(43)「(苦に)ならないです」(48)「思わなかったです」(49)「使わなかったです」(51)「来なかったです」のようなものばかりである。つまり、「なりませんでした」「やせませんでした」のような丁寧体の否定の形はとらず、常体で言い切って丁寧体の「です」をつけたものがほとんどである。「ません」の形で過去形にすると、さらに「でした」を付加して「～ませんでした」となるから、こちらの方がより丁寧な形であるが、今回の話者たちでみるかぎり簡単な形を選んでいくことがわかった。

以上の結果は否定文における敬語の簡略化の1例とも言えるもので、敬語の現状をみる上でも興味深いものである。

—まとめ—

日本語教育の現場で、類似の語の異同や、類似の型の選択に迷うことが多いが、そうした際、現在の話しことばの実態を知ることが必要になってくる。今回の調査は、現在の日本語の話され方の特徴を知ることと、性差の有無を知ることが主なねらいであった。

その結果、日本語教育の現場にすぐ適用できそうないくつかの事実がわかった。

性差については、男性の話しことば、女性の話しことばに対するステレオタイプのみかたはもうほとんど役に立たないことがわかった。

冒頭で紹介した女性の話し方、また女性的表現の特徴とされた、言い切らない形で終わる、ぼかし、情緒的表現などの指摘については、「言いさし文」の使用が女性の方にやや多いとはいえ、きわだった差とまで言えない程度であり、「完結文」の使用では男女差がなかったことから、以上の指摘が当を得ているとは言い難いことがわかった。

男性に倒置表現が多いとの指摘については、今回の調査でも同様の結果を得たが、女性に「情緒的優雅な表現を選ぶ…押しつけずに述べる…」に関しては、「～わけです」の使用が男性と変わらないこと、逆接の接続語句を男性より多く使うことなどから、これらの指摘も再検討の余地があると思われる。

ねじれ文が男性に多かったことは、男性に「主張、説得をする」特徴があるとの指摘と矛盾するものでもある。

性差の特徴としてあげられているひとつひとつの側面について具体的事実に基づく検証が必要であるが、今回はそのうちの一部しか調査できていない。その一部についてみても性差として明確に断定しうる側面はきわめて少ないことがわかった。文末の完結文、中止文の使われ方、「～から」の使われ方、「わけ」の使われ方など共通部分の方が多く見出された。

特殊な側面を拡大して印象として性差をとりたてて梓づけるより、日本人の話し方として男女にみられる共通性をとりあげるほうが、男と女がともに楽に生きていくうえでどれほどか積極的な意味があることを考えたいものである。

調査対象の話者一覧表（50音別）

ケース1	赤瀬川原平	50代	画家・作家
2	今井 一雄	30代	徒歩旅行家
3	梅沢富美男	40代	演劇役者
4	角川 春樹	〃	出版、映画製作、俳人
5	斎藤 茂男	60代	ジャーナリスト
6	千田 正穂	40代	アナウンサー
7	辻 恭平	80代	著述家
8	堤 大二郎	20代	タレント
9	原田 碩三	50代	大学教授
10	南 伸坊	40代	イラストライター
11	大庭 照子	50代前半	歌 手
12	小山内美江子	50代後半	脚本家
13	神田 陽子	30代前半	講談師
14	児島なおみ	〃	絵本作家
15	白鳥笑美子	〃	歌 手
16	関口 典子	30代前半	映画製作
17	林 真理子	30代後半	作 家
18	羽田 澄子	60代前半	映画監督
19	丸山 由美	30代後半	バレーボール監督、選手
20	南 とめ	70代後半	フィルム編集者

注1 『日本語教育事典』（大修館 1982）

注2 堀井令以知「男性の言葉と女性の言葉」

『講座 日本語と日本語教育第1巻』（明治書院 1989）

注3 「表現と文体」『日本語概説』（桜楓社 1989）

注4 益岡隆志編『基礎日本語文法』（くろしお出版 1989）

注5 「話しことばと私」『日本語学 vol 7』（明治書院 1988年3月）

注6 『日本語初歩』（国際交流基金 1971 P 225）

注7 『日本語初歩』（国際文流基金 1971 P 225）

— おわりに —

遠藤論文「男と女の話しことば」に詳しく紹介されているように、男性と女性の話しことばについては、従来、根拠のあまりははっきりしないステレオタイプな見方が存在した。重複するが、これらの論のうちの一つ『講座日本語と日本語教育、第一巻日本語要説』（明治書院 1989、9）における堀井令以知氏の論を次にあげる。

一般に、男性の話しぶりは力強く支配的で、主張性が強く、率直で、権威を持ちたいと願う。女性の話しぶりは、柔らかで協調的で、えん曲的であるが、つまらぬ話題に熱中し、繰り返しが多いと言われる。こうした話し方の違いが語彙の選択にも見られるわけである。（同書P.258）

この説の論拠の不確かさについては、既に遠藤が昨年の『共同研究 女性の話しことば — テレビのインタビューから —』（ことば10号）において指摘し、さらに本年の論文「男と女の話しことば」においても言及しているが、他の諸説においても論拠がはっきりしないまま印象批評的に男性のはなしことばは断定・命令的論理的、女性はえん曲・協調的・情緒的などといわれることが多い。このような性差を前提とするステレオタイプの話しことば「観」とでもいうべきものは、昨年の女性に関する調査に引続き、男性に関する当調査においてもほぼ完全に否定されたといえるだろう。

敬語の使用状況については述語部分についても、名詞についても性差よりは、個人や、話題の内容によって決まってくる部分が大きいとの結果を得た。名詞に関しては、年配の女性においては「お」「ご」や「わたくし」の使用が男性に比べて顕著であるが、年代が下がると、男女差はほとんど見られない。

終助詞に関しては、これをつけない言い切りの型が男性より女性の方に多く、これは従来、女性の方が断定的でなく丁寧であるとされた傾向に反するものであった。その他使用頻度の高い応答詞や終助詞については男女差は見られない。

縮約形については調査したほとんどの項目で男女差は見られず、一部について、女性の方が縮約率が高いもの（〈の〉→〈ん〉）と男性の方が高いもの（〈～という〉→〈って〉〈っていう〉）とがある。全体的な傾向としては特に女性の方

が縮約を用いず敬意が高いということはない。

また文末や接続語句の様相においても、部分的には従来言われてきたような男女差の傾向を示している項目もあるが、それを否定するような傾向も多く見られ、文の型の差異を性差として明確に断定し得る側面はきわめて少ないことがわかった。さらに「～から」「わけ」の使われかたなど、男女に共通する部分の方がより多く見出されてもいる。

話し手が異なり、インタビュアーが異なり、話題も異なる。そのような談話に用いられることばも異って当然であろう。今回のような調査では、話し手や話題はともかく、インタビュアーや全体の雰囲気についてはなるべく共通する部分の多い資料を選んだわけだが、それでも個人差や話題差によることばへの影響は否定のできないものがある。そのような中で、談話文の男女差ということが仮にあるとするならば、それは男女の置かれた談話の状況の差を反映したものであるというべきではないだろうか。

男女にかかわらず、自己を主張して相手を説得したり支配したいときにはそのような話し方をする。それは相手をたて、自分をそれにあわせていこうとする話しぶりとはおのずと違ってくる。社会全体が男性を支配的なもの、女性を被支配的なものにとらえ、また男性には他者に対し論理的・説得的に自己を主張しなくてはならない機会を与え、女性をそこからしめ出して、まわりの人々とぶつからず、協調していくことをのみ美点として期待するならば、男性も女性もそれぞれその場での必要性に応じて話すであろうし、そのことばが結果として男女違うものになることは十分に考えられる。過去の男性・女性の話しことばに関する諸論は、このような男女における談話の状況の差を考慮にいれず、そこで話されることばの違いのみを問題にしている。それはとりも直さず旧来的な男女観のありようと一致していったわけである。

しかし男性であれ女性であれ、ことばを伝達の機能として最も有効に駆使していこうという意志にかわりはなく、それは同一の談話の状況下では、同じようなことばとして現れるのだということを今回の調査は示した。インタビュアーの問いに対して自分のした仕事や生活について語り、それがラジオやテレビを通じて全国に放送されるという同一の談話状況の中で、従来言われてきたようなことば

の男女差はほとんど現れなかったのである。また、個人としての談話の状況をとらえる意識の差、話題のちがいなどにもよるのだろうが、従来の説に反し、男性の方により丁寧、協調的なことばの使い方の現れている例も少なかった。もちろんこれはすべての面で同時に男女のことばが同一化していくということではない。本調査の結果における印象では陳述に大きな影響を与えない名詞的部分に男女差が比較的残っていくように思われる。例えば自称詞「ぼく」のように男性特有で述語部分から独立しているものについては今後もそう簡単に変化しないだろう。また、「お」「ご」のつくことばや、女性の「わたくし」などにも同じような傾向は見られる。しかしこれらについても若年層には既に年配層に見られるような大きな性差はない。このように考えていくと、習慣的に性差的部分を残しつつも全体の傾向としてことばの男女差はなくなっているといっていよう。

女性の社会進出がさかんになり、男性と女性、また年長者と年下の者などが同等の立場で同等に議論をかわし結論を得ていくという機会は今後ますます増えていくだろう。その中では、本来的な性差によるのではないことばの男女差がなくなっていくのは当然のことであろう。それをことばのうるおいがなくなる、文化の崩れだと情緒的に否定する考え方もあろうかと思う。しかし、形式的に性差に縛られ伝達機能において十分ではない、ということばよりも、今求められているのは互いに相手を尊重しつつ自分の意志も伝えられるようなことばである。そのようなことばが生まれてくることにより、男女を超えた新しい文化も生まれてくるのではないだろうか。